

足りない進学費用／教師諦め就職

希望
この手に
沖縄の貧困・子どものいま
第1部 ⑮



離島

「オリンピックに出たら見に行くと友達に言われたことがある」。離島にある高校3年の女子生徒(18)はほかにかんだ。高校から本格的に始めたスポーツ個人競技で県代表になった。県外の大会でも好成績を取め、大学に進学すれば奨学金をもらえることになっていった。しかし3年の夏、家の厳しい経済状況から東京の大手スーパーへの就職を決めた。競技からも離れた。「たぶん就職するだろう」と思っていた。(スポーツの道に進めるとは)期待していなかったと目を伏せた。父も母も4人きょうだいの3番目。母は幼いころに他界したが、ユイメール(助け合い)精神が残っている島で、周りの親類が世話をしてくれた。「親戚に聞かれて育った。寂しいと感じることはあまりない」。

一方で家計は厳しかった。親光や農業、漁業が中心の島で、父の仕事は不安定だった。

夢、父に話せず



高校3年生、離島を去る気持で、シニア大会に出場する選手が手を握る。写真：琉球新報

「自分らしく」次見据え

県を出して、学費全額分がバカに出した。定期的に親が来れる親戚は、お金に余裕があるだけ参加。県代表の金額も、県からの補助金も定額。身近な夢があった。「大学に

た。島外に出稼ぎに行くこともあった。現在は、繁忙期に農業と漁業を手伝っている。上のきょうだいは、同じ高校を卒業して島外で就職した。きょうだいに依って、高校入学時からあしが育英会の奨学金を受け付けている。卒業したら返済が始まる。

卒業後は就職すると考えていたが、周りの大人や友人から「大学に行きなよ」と面を掛けられる中で考えが変わっていった。「頑張って良い結果を出して、アルバイトの給与か

つよくなった。しかし現実では、部活よりバイトが優先だった。飲食店やホテルで週3〜5回午後5時〜9時まで働いた。給食は月給で4万円ほど。バイトの合間を縫って練習した。夜バイトがある日は、早朝の午前6時半から練習した。

県代表として出場する県外の大会には旅費の補助が出るが、本島で開催される県大会や記録会は自ら払った。飛行機代に加えて宿泊費が必要になる。アルバイトの給与か

メモ 離島の高校生 離島の高校生は部活動の大会や資格試験の受験で本島に移動する必要があり、旅費がかさむ。島外に進学するにも実家を出なくてはならず、学費のほか住居費も必要となる。昨年12月に琉球新報社と県高等学校障害児学校教職員組合が合同で実施した、県内の高校教職員向けアンケートでも、離島在住の職員から「旅費を出せず、本島で受験する資格試験を諦める生徒がいる」「旅費が掛かり、スポーツや文化系大会の参加を断念する子が多い」「実家から通えないので進学を諦める子が多い」などの意見が上がった。

進学したら、これまであまり出られなかった記録会に行けると思った。高校の体育の先生になりたかった」。

進学を断念したことも、そもそも希望していたことも父には話していない。「母が悪いわけではない。家のことを分かっているから言いたくなかった」。父は東京での就職が決まったことを告げると「寂しくなるな」と言われた。

島に残る豊かな自然、のんびりとした気分にも慣れる海。家族のよすがが強い島の人々。その全てが大好きだ。「今は、目を離れることに不安が大きい」と辛抱に耐える少女。「でも、いろいろな地方の人と働くのが楽しみ。自分らしく生きていきたい」と次の舞台を志望した(子どもの貧困取材班)